

創作実験劇場

2012年2月25日(土)

東灘区民センターうはらホール

17:30開演

出演 寺井美津子 金沢景子 菊本千永 かじのり子 向井華奈子 石井麻子 板垣祐三子 灰谷留理子 梁河茜 平岡愛理 山田麻以 衣川佳子 数越慶子
本田詠理奈 稲益夢子 宮本幸絵 菊原麻衣花 上田理央 稲益敦子 三木涼音 末吉花林 菊原麻理奈 渡辺菜子 松岡椿 原田光琉 藤田佳代
拍踏組 大待元輝 岡村和彦 菊原敬 菊本壮永 坂本武士 重友理帆 田中文菜 橋本慧 平岡正之 細田文明 松岡宏昌 梁河奉熙

創作実験劇場・・・創作作品、新作発表の場。勢いで作品を創ってはいけるものの、この作品、これでいいのか、お客様には分かってもらえるのか、そんな不安がついコメントや解説へと向かわせてしまう、でも、そもそも自分の作品を解説することは許されることなのか、タイトルとその踊りだけで勝負(?)するべきではないのか、抽象画だったら解説はおろか「無題」なんてものもあるではないか、私はこの研究所通信を編集するときいつも悩みます。踊りに解説はフェアなのか、そうでないのか。でも作者の立場としてはやはり自分の作品は「分からなかった」で終わるよりは、こんな思いで創っているのか、ああ、こういう意味があるのか、など分かっていただきた上で、いろいろ感想をいただけるととても嬉しいものです。くどくどと書きましたが、要するに、今回も作者の思いを掲載しております。前もって読んでいただくもよし、後から振り返っていただくもよし。いえいえ、その前に・・・興味を持って観に行こうかな、と思っていただければ幸いです。

菊本千永

海 藤田佳代

千秋次郎先生から東北の海に向けてのすばらしい音楽をいただきました。これ幸いととびついて踊りを創りました。

- ・海は岸边に向かって太古からずっと囁いている
- ・海はまだ生まれていないものを抱きかかえている
- ・海は決して立ち去らないものの歌を聴いている

Flow 灰谷留理子

flow...もの、年月などが流れるように動く。過ぎていく。今書こうとしていることは未来であり、いまこれを書いているこの瞬間もすぐ過去になる。どの瞬間も「いま」になるんだなぁと今更ながら思うことがありました。でも、そこには当たり前ですが、時の流れというものがあります。

嬉しいことがあって喜ぶ瞬間があっても、辛く悲しい事がある心が止まってしまっても、時は流れているし、過ぎ去っていく。

昨年3月11日に東北で震災がありました。17年前には神戸の震災もありました。

そこからの年月や状況を考えて時、比べ物にはならないし、比べるものではないのですが、近年自分自身に起こったこと、そこからの時の流れを改めて感じました。そして、これからも時の流れとともにまた進んでいくのだなぁと...

with or without you 梁河茜

2cellosがカバーした「with or without you」という曲で題名をそのまま踊りにしてあります。「あなたと一緒に生きてゆけない、でもあなたなしでは生きてゆけない」という歌詞が原曲にあり、二人が写し寄せられ目を合わせるけれどすれ違う、そして見つめ合い傍まで行けれどまた行き違ってしまう・・・そんな踊りです。佳代先生が音楽と題名をつけてくださり、華奈子先生に振りを考えていただいて、愛理ちゃんには構成を練ってもらいました。まだまだ未熟で頼りっぱなしな私をみなさんが支えてくれています。自分の中ではまだ様々な感情が行き来し思い悩んでいますが、、素敵な作品になるようがんばります。

なにごとにもなきこの眺め 菊本千永

たつの市にある宝林寺というお寺のご住職から「この村に 大燈国師うまれたり なにごともなき 青田の眺め」と書かれた色紙をいただきました。尊い方が生まれた場所であってもなにごとにもなく青い田んぼがひろがっている、というおらかな歌だと解釈し、日々特に思うことなく眺めていたのですが、東日本大震災で「なにごとにもなき眺め」がどれだけ大切で、そして一瞬にして消えてしまうものであるのかを痛感しました。日常なんてすぐになくなってしまふ・・・と思った17年前のことも思い出しました。それでも地震は天災です。これは全くの又聞きですが、津波による塩害を受けた田畑は、あと数年経つととてもいいミネラルバランスをもつ土地に生まれ変わるそうです。亡くなった人は帰ってはきませんし、心の傷は消えません。元どおりの復元はできませんが、それでもふるさはきっとよみがえる日がやってくると思います。天災だけであつたなら・・・原発事故さえなければ！国ぐるみの人災さえなければ！傷ついたふるさとに立つことすらできない方々の無念を思うとやりきれません。人類最悪の人災である戦争も地球からなくなつてはいません。明日生まれてくる新しい命が最初に見つめるものば「なにごとにもなき眺め」であってほしいと切に願います。人災でだけはあつてはなりません。これは避ける努力ができることですから。

・きのう あのとたちがおいかけて ・きょう わたしたちがうけとった ・あした この子がみつめるだろう なにごともなきこの眺め

今回の作品についてちょっとしたお話 向井華奈子

作品タイトルにもある「柘榴」。

この「柘榴」は ボッティチェリ作の「柘榴の聖母」という宗教画に描かれている「柘榴」です。この絵画の「柘榴」はキリストの「受難」を表しているとの解釈と「復活」を表しているとの解釈の2面性をもっているそう。

この地球上でのあらゆる災害「受難」そして これからの再生「復活(繁栄)」のために 今 この地球へ贈る「柘榴」-受難と復活の果実。

また今回 私個人のお衣裳を鷲尾華子さんというデザイナーの方に作っていただいております。華さんとは昨年3月にコンテンポラリーダンスの平山素子さんのワークショップウイングで一緒にさせていただいたのをきっかけに今回 作っていただけたこととなりました。(また 名前に同じ「華」っていう字！これもまた一緒にさせていただけるきっかけに！) 作品の内容や作品に対する私の思いなどを共有していただき 華さんなりにこの作品の「柘榴」を考えてお衣裳を作ってくださいました。お衣裳とのコラボレーション作品です。

この経験は私にとってとても貴重で おなじく年どうして作品について語れることは楽しく幸せでした。この経験によって更に深く作品と向き合えたように思います。

花だより 金沢景子

家の近所の王子動物園の桜の樹は、春夏秋冬それぞれの立ち姿が目を楽しませてくれます。

春、花が見ごろを迎えたら、遠くに住んでいる息子に「今年もまた見事だよ〜！」と満開の写真を送ります。息子からは「こっちの桜もすごい〜」と自慢げに写真が届きます。毎年繰り返されている花の便りを、当たり前にもこれからも送り続けたい・・・携帯電話という便利なものの陰ですが・・・。

阪神大震災と、東北大震災。そしてまた有り得る天災と想定外の出来事が、他人事ではなくなりました。大陸がくっついいたり離れたり・・・地球は生きものですから、いろんな変動は避けられません。そして、戦争や核の脅威もなくなっていないし、いつこの身に何があるかわからないし、自分だけが助かるなんてことも思わなくなりました。が・・・花が散った後の新芽。夏の緑葉。秋の風に舞う染まり葉。冬の裸樹。土も風も陽も雨も何一つ欠けても成り立ちえない自然の壮大な創造物の目の当たりにできるよこびを込めて、この生ある限り、花だよりを届けたいと思います。

余談ですが、福島県三春町に日本三大桜の名所、樹齢1000年の紅しだれ桜が震災の影響を受けずに昨年も見事に花を咲かせたそうです。10000本の内2000本がしだれ桜だそうです。桜好きの私はぜひ見に行きたい！！

原発事故の現場に近いので、なおさら毎年の開花が気になります。メディアを通してですが、三春町からの花だよりも楽しみです。

音信—わたしは無事です。 寺井美津子

阪神淡路大震災の時、伊丹にいた私は神戸の実家と音信不通になってしまいました。結局、テレビの端っこに映ったかどうかの実家を確認できたのが、当日の午後3時ごろでした。その間、どれだけジリジリしたことか。

今年1月17日のテレビ番組で、震災の語り部をしている男性が、今は公園になっている娘の亡くなった場所を中学生たちに語っていました。17年経った今も、これからも、大切な人と何とかしてつながりたいという強い思いを感じました。大切な人が無事である音信を求める思いを踊ります。

わたしに似た人 かじのり子

あの人はわたしに似ている
だけど わたしはあの人にはならない
あの人とは 幼いきょうたいをマンションの一室に置き去りにし、死なせてしまった母親のこと。

事件後、「私とあの人、似てるかも」とコメントを新聞に寄せた母親たちがいました。

決して子どもたちを愛していないわけではない。でも、行き詰ってしまい、つい声を荒げることも。私も息子に「早く食べなさい」、「早く行きなさい」、「早く寝なさい」と、イライラとしながら日に何度も同じことを言ったり、大きな声でどなったりしてしまうことの繰り返し。私こそあの人と似ている。

息子に怒った後の 何とも言えない、胸の辺りの肉をえぐり取られるような感覚からこの踊りを創りました。

My favorite thing 平岡愛理

私の「My favorite thing」は、沢山ある大切な物の中でも一番大事にしてきたお人形です。秘密話をしたり、悲しい時も楽しい時もいつも一緒に遊んでいました。体験された方もいるかもしれませんが、幼い頃は不思議とお人形とお喋りでできていました。でも、次第に私から語りかけるだけのお人形からは返事が返ってこなくなり、当時は本当に生きている友達のような存在でしたが、今となってはお人形です。少しさみしいですが、語らずとも私を見守ってくれると信じ、これからの困難も自分の力で乗り越えていかなければと思います。

曲は「Sound of music」でお馴染みの「My favorite things」です。両親が好きなギタリストが少しアレンジを加えたものですが、いつかこのギタリストの曲で踊りを作りたいと考えていました。そして今回、自分の作品を出させていただけることになり、両親の好きな曲で踊れることにとてもうれしく思います。

このお人形に対して感謝の気持ちを込め、作品を観て下さった方には、皆様それぞれの「My favorite thing」との思い出を少しでも頭に浮かべていただくことができればと願っています。

届ける—東北の地震と津波と原発事故で亡くなった数限りない命たちへ 藤田佳代

下駄を手に履いて拍子木のように打ち鳴らして踊ります。1打ごとに一つの命（どんなに小さなものでも）の供養になればと思ってつくっています

この下駄を探すのに苦労をしました。25 足も売っているお店はなく また問屋にも在庫はなくちょっとあわてましたが 老舗旅館の下駄をいただきピンチを切り抜けました。また かわった歯のついた福島桐の下駄にめぐりあいました。これを打つとカチッカチツという音ではなく ポクッポクッという深みのある音がします。福島の下駄屋さんが震災と高齢のためもう下駄を作らないといって御影の下駄屋さんに預けたそうです。幸運にも7 足手にいれることができました。

さらに音楽の代わりに男性(含女子 2 名)による拍手と足踏みで踊ります。客席から舞台にむかって音作りをしていただきます。カッコイイ ステキなメンバーたちです。

踊りと音にご期待下さい

今後の予定

第 25 回こうべ全国洋舞コンクール 4 月 29 日（日）神戸文化ホール中ホール
出演 三木涼音「あ、新芽！ 冬の木立の中に」 菊原麻理奈「わたしのボールは病気です」 藤井花名「きょうはいい天気」

舞台のご報告

寺井美津子モダンダンスリサイタル

私にとって3回目のリサイタル。2回の反省を生かして、何とかいい会にしたいという思いを持って、準備万端臨んだはずだったのですが、やはり、パタパタとしてしまい、先生方をはじめ、出演者の協力のもと、何とか無事に終えることができました。

特に「一歩 また 一歩」は、振付を各先生方にお願ひし、佳代先生に監修していただきながら、創っていききました。演奏の佐藤泉先生が何度も練習に来て下さり、演奏者からの提案もいただき、文字通りみんなで創り上げていきましたが、私だけではできなかった深さ、厚みが出たと思います。

東日本大震災をはじめ、厳しい社会情勢の中、リサイタルを成功裡に終わることができましたのも、この催しに係わっていただいた皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

寺井美津子

藤田の世界を継承展開する

神戸で独自の哲学を持った活動を続け、多くの支持者を持つ藤田佳代主宰の舞踊研究所。幹部団員のリサイタルを順番に行っている。今回は最古参ともいえる寺井美津子の三回目のモダンダンスリサイタル。リサイタルといっても藤田はじめ主要なメンバーが振付にも参加している。再演、改訂再演をふくめて五作品が上演された。

まず『一歩 また 一歩』。ヴァイオリンの佐藤泉の演奏するパッパの無伴奏バレエティータによって寺井がセンターで動きの空間をつくる。金沢景子、菊本千永、かじのり子、向井華奈子の中堅幹部がそれぞれ独自の感性で第一歩への複雑な思いを描く。一方若い二人は対照的に屈託のない動き。それぞれが自分の動きを考案、全体として世代と個性の特性がうまくちりばめられた、いかにもこの団体らしい作品。『歌わない鳥』。スティーブ・ライヒの音楽で、若いダンサー九人がユニゾンの中で集散を見せる、エチュード的なダンスだ。『はないちもんめなんて大きい』。子取りの童謡遊戯を展開しながら、寺井の仲間はずれの悲しみを描く。改訂再演でテーマがより明確になった。『埋み火』。近藤ヒロミのアフリカの民族楽器による素朴だが彩い響きの作曲、演奏によって、寺井を群舞がとりまく。動きの構成はたしかだが、もう少し秘められた情念が欲しいところ。最後は藤田の再演作品『今日のこの空ほししいと さいしよはグー』。無邪気に遊ぶ子どもたちを取り巻き、襲う自然の変化。群舞が白と黒の衣裳と動きで、美しく静かな自然と激しく厳しい空間を作り出す。最後に生命の根源を表すような青衣の寺井と全員が登場、子どもたちに人間と自然のかかわりを体験させるように終わる。全体として、動きも表現も激しくはないが、独特の趣を持つ説得力のある空間、軌跡を創造する藤田スタイルを継承。そこに新しい感覚を加えようという意識が感じられた。

うらわまこと（週刊 オン ステージ新聞 2012 年 1 月 27 日号）